

部落の若者の部落問題意識と 部落出身者としてのアイデンティティ

部落青年の部落問題認識調査から

内田龍史

要約

本稿は、被差別部落の若者を対象とする量的調査から、彼／彼女らの社会意識・部落問題意識と、部落出身アイデンティティの現状を明らかにすることを目的としている。

分析の結果、部落出身アイデンティティは、部落解放運動によって獲得され、継承されてきた側面を指摘できる。また、社会意識は全体的に私事化傾向が見られるものの、社会への関心の高さや、社会変革が可能であるという意識が部落出身者としての意識の強さと関連しており、社会的存在としての部落出身アイデンティティが浮かび上がってきた。

はじめに

1960年代以降、部落解放運動や解放教育運動、さらには同和対策事業による政府・自治体の財政的なバックアップのもとで、部落問題の解決をめざし、誇りうる「部落民」としてのアイデンティティ形成や、学力保障・進路保障の取り組みが行われてきた（内田2010）。かつて我妻洋（1964）が指摘したような差別の眼差しによって形成される否定的なアイデンティティではなく、差別と「闘う部落民」としてのアイデンティティなど肯定的なアイデンティティが部落解放運動の営みによって形成されてきたのである（内田2007）。

当該社会において無関心なままに放置され、ときに差別や偏見の対象とされがちなマイノリティ当事者のエンパワメントをはかる社会運動は、差別を生み出す社会の変革とともに重要である。それは部落問題においても同様であり、部落解放運動はそうしたエンパワメントの側面を持ち続けてきた。しかし、グローバル化が進行し、非正規雇用が増大するなど産業構造が大きく転換しつつあるなか、2002年に一連

の同和対策に関する特別措置法が期限切れを迎えるなど、近年の部落・部落問題をめぐる政治的・経済的变化は非常に大きい。こうした変化を受けて、部落の若者の部落出身者としてのアイデンティティはどのような状況にあるのだろうか。

本稿は、被差別部落の若者を対象とする量的調査から、部落問題意識と部落出身者としての社会的アイデンティティの現状を明らかにすることを目的とする。

1 先行研究

部落出身者はどのような部落問題意識を持っており、どのように「部落民」としての社会的アイデンティティを形成してきたのか、さらにはその社会的アイデンティティの内実はどのようなものか。これらについての実証的研究は、それほど多くはない。部落解放運動は、1965年の同和対策審議会答申、1969年の同和対策事業特別措置法以降、大きく進展を遂げるが、それ以前に部落出身者の意識状況に注目した初期の研究としては、山本登（1959）、我妻（1964）

などがあげられる。彼らは、差別のもとに置かれている部落出身者の自己像（現在で言うアイデンティティ）、特にその緊張状態を描いているが、アイデンティティに関する研究が再び登場するのは1990年代以降になってからである¹⁾。

その理由として考えられるのは、同和対策審議会答申や、運動の要求などによって部落問題の問題性が「劣悪な環境」（実態的差別）および「差別する側の意識」（心理的差別）の大きく二つの問題に分類、制度化されたことであろう。1990年代後半に奥田均（1998）が同和対策審議会答申以来の「実態での被差別」、「心理面での加差別」、「差別事件」という部落差別のとりえかただけではなく、「実態面での加差別」と「心理面での被差別」を加えた五領域からとりえなおすことを提言しているように、同和対策審議会答申の枠組みでは、部落出身者の意識に対する視点が抜け落ちてしまうのである。

こうした認識枠組みの問題に加えて、同和地区を対象として部落住民の意識を明らかにすることによって、部落差別を正当化する理由として根強く存在した、部落住民の意識や態度を差別の原因として非難する、いわゆる当事者責任論を誘導してしまうことを恐れたこともその要因として考えられる。そのため、近年においても、特に量的な分析については八木晃介（2004）・内田龍史（2005, 2006, 2007）など若干見られる程度で、十分に明らかになっているとは言いがたいのが現状である。

2 データと方法

1 調査方法

本稿で用いるデータは、部落解放同盟中央本部青年運動部が実施した「部落解放同盟中央本部青年アンケート」から得られたものである。

調査対象・地域は、部落ならびに部落から他出した若者（15～39歳）である。実施期間は、2009年7月から2010年7月にかけてであり、有効回収は851票である。今回の調査データを分析するにあたっての注意点として、本調査はランダム・サンプリングではなく部落解放同盟（その中心は青年部）を通じたスノーボール・サンプリング（機縁法）によるものであり、部落青年の全体像ではなく、あくまでも部落解放同盟の運動に近い層の現状把握と考えるのが妥当である。とはいえ、851人の部落の若者の回答は非常に貴重なデータであり、無視されるべきものではない。

2 調査データの特徴

調査項目は、年齢・性別・学歴・就業・部落問題意識・被差別体験・若者の社会意識・現在の運動参加などであり、これら調査結果の全体像についてはすでに『部落青年の部落問題認識調査報告書』（部落解放・人権研究所編 2011）にまとめられている。詳しくは本報告書を参照されたいが、以下、簡単にデータの基本属性を示しておく。なお、調査項目の設定については内田（2005, 2006）などを参照した。

回収票の府県別集計については大阪が186人（21.9%）と最も多く、以下、香川90人（10.6%）、佐賀84人（9.9%）、兵庫75人（8.8%）などで多くなっている。府県別集計を地域ブロック別に行ってみると、近畿ブロックが46.7%と半数近くを占める。以下、九州17.9%、四国11.5%、関東8.9%、中国8.5%、東海6.6%となっている。

年齢階層は、「25～29歳」が25.1%、「30～34歳」が23.9%、「20～24歳」が23.6%、「35歳以上」が13.4%、「20歳未満」が13.0%となっている。「無回答・不明」を除く平均年齢は27.03歳である。

性別は、「男性」が66.2%、「女性」が33.7%である。

表1 最終学歴3区分（既卒者のみ）

	全体		男性		女性	
	人数	%	人数	%	人数	%
初等教育	142	19.6	102	20.5	40	17.5
中等教育	341	47.0	244	49.1	97	42.5
高等教育	235	32.4	145	29.2	89	39.0
無回答・不明	8	1.1	6	1.2	2	0.9
合計	726	100.0	497	100.0	228	100.0

注)「初等教育」は「不就学」「小・中学校卒業」「高校中退」の合計

「中等教育」は「高校卒業」「短大・高専・専門中退」「大学中退」の合計

「高等教育」は「短大・高等専門学校卒業」「大学卒業」「大学院卒業」の合計

在学者を除く最終学歴は、「初等教育」が19.6%、「中等教育」が47.0%、「高等教育」が32.4%である（表1）。性別に見ると、「短大卒」の割合が女性の方が高いために、男性よりも女性の方が「高等教育」の割合が高くなっている。

単純に比較することはできないが、高学歴化が進展している全国的な傾向と比較した場合、本調査における「初等教育」程度で学歴を終えている人の割合はかなり高いと考えられる。たとえば、およそ10年前の2000年の国勢調査では、15～39歳の卒業者に占める「初等教育」の割合は7.5%にすぎないのに対し、「中等教育」は46.9%、「高等教育」は41.7%にのぼっている⁽²⁾。低学歴傾向が顕著なことが、本調査データの大きな特徴である⁽³⁾。

結婚経験は、「未婚」が61.8%、「既婚」が32.0%である。

居住地は、「部落居住」が67.6%、「部落外居住」が24.4%となっている。ただし、「部落外居住」とはいえ、部落解放同盟の支部や青年部を通じた調査であることから、調査票が回収できる範囲に居住している層（おそらく部落周辺部）が大半であると考えられる。

部落生まれかどうかについては、「部落生まれ」が67.6%、「部落外生まれ」が25.1%となっている。

両親の組み合わせについては、「父親のみ部落」24.8%、「母親のみ部落」17.0%、「両親と

も部落外」11.2%などになっており、「夫婦とも部落」は29.1%と3割に満たない。

家庭の階層的背景を示す15歳の頃の家庭の経済的状况については、「普通」が56.8%と最も割合が高く、以下、「やや苦しかった」18.8%、「大変苦しかった」10.0%などと、3割弱が「苦しかった」としている。

仕事の状況について、「無回答・不明」を除く有効率は、全体では有業者は83.8%、無業者は16.2%となっている。性別に見ると、有業者は男性で89.5%、女性で72.5%と、男性の方が割合が高くなっている。逆に無業者は、男性で10.5%、女性で27.5%と、女性の方が割合が高くなっている。

被雇用者のみを取りだし、「正規の職員・従業員」と「非正規雇用」とにわけて見ると、「無回答・不明」を除く全体では「正規の職員・従業員」が64.6%、「非正規雇用」は35.4%となっている。性別に見ると、「正規の職員・従業員」は男性で72.7%であるのに対し、女性では45.2%にとどまる。逆に、「非正規雇用」は男性では27.3%であるのに対し、女性では54.8%と、女性で割合が高くなっている。

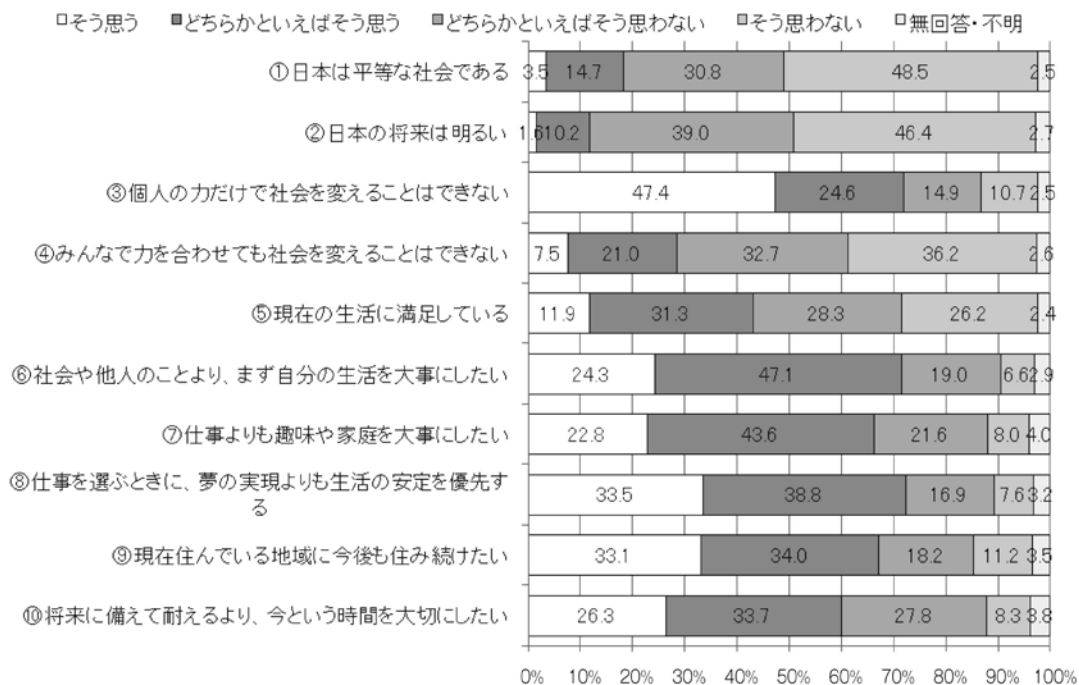


図1 社会意識 (N=851)

3 社会意識・部落問題意識と部落出身者としてのアイデンティティ

1 社会意識

調査対象となった若者はどのような社会意識を持っているのだろうか。本調査では、社会意識(図1)について10項目を用意している。

全体的な傾向を見ると、日本は平等な社会ではなく(「①日本は平等な社会である」:「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」=79.3%)、日本の将来は明るくないととらえている(「②日本の将来は明るい」:「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」=85.4%)。また、「③個人の力だけで社会を変えることはできない」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=72.0%)が、みんなの力を合わせれば社会を変えることができると考えている(「④みんなの力を合わせても社会を変えることはできない」:「そう思わない」+「どちらかといえばそう思わない」=68.9%)。

生活に関する意識については、「⑥社会や他人のことより、まず自分の生活を大事にしたい」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=71.4%)、「⑦仕事よりも趣味や家庭を大事にしたい」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=66.4%)、「⑧仕事を選ぶときに、夢の実現よりも生活の安定を優先する」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=72.3%)、「⑨現在住んでいる地域に今後も住み続けたい」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=67.1%)、「⑩将来に備えて耐えるより、今という時間を大切にしたい」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=60.0%)、など、生活の安定や地元での現在の私生活を大切にしようといった意識が特徴的である。

これらの社会意識項目を用いて主成分分析を行った(表2)。第1主成分は、「①日本は平等な社会である」「②日本の将来は明るい」など、日本についての評価の項目で主成分負荷量が高いことから、「日本社会への肯定的評価」と名

表2 社会意識の主成分分析

	第1主成分	第2主成分	第3主成分
①日本は平等な社会である	0.826	0.111	0.018
②日本の将来は明るい	0.834	-0.027	-0.006
③個人の力だけで社会を変えることはできない	-0.065	0.534	-0.083
④みんなで力を合わせても社会を変えることはできない	0.068	0.691	-0.115
⑤現在の生活に満足している	0.560	-0.178	0.328
⑥社会や他人のことより、まず自分の生活を大事にしたい	0.051	0.677	0.141
⑦仕事よりも趣味や家庭を大事にしたい	0.029	0.183	0.573
⑧仕事を選ぶときに、夢の実現よりも生活の安定を優先する	-0.119	0.545	0.290
⑨現在住んでいる地域に今後も住み続けたい	0.110	-0.211	0.640
⑩将来に備えて耐えるより、今という時間を大切にしたい	0.049	0.065	0.608
合計	1.880	1.666	1.172
分散の%	18.8	16.7	11.7
累積%	18.8	35.5	47.2

注) 因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

づける。すなわち、得点が高いほど将来は明るく、平等だと考えているということである。第2主成分は、「④みんなで力を合わせても社会を変えることはできない」「⑥社会や他人のことより、まず自分の生活を大事にしたい」「⑧仕事を選ぶときに、夢の実現よりも生活の安定を優先する」「③個人の力だけで社会を変えることはできない」などの項目で主成分負荷量が高いことから、「社会への相対的無関心」と名づける。得点が高いほど社会は変革できず、他人や社会のことよりも自分の時間生活を大切にす意識が強いということである。第3主成分は、「⑨現在住んでいる地域に今後も住み続けたい」「⑩将来に備えて耐えるより、今という時間を大切にしたい」「⑦仕事よりも趣味や家庭を大事にしたい」で主成分負荷量が高いことから、「地元生活重視」と名づける。この得点が高いほど、地元に住み続けたい、今の時間、趣味や家庭を大切にしたいという意識が強いということである

以上の結果、これらの社会意識については、「日本社会への肯定的評価」、「社会への相対的無関心」、「地元生活重視」の三つの変数にまとめることができた。

2 部落問題意識

部落問題意識(図2)については9項目を用意している。全体的な傾向を見ると、肯定する意見の割合が高い項目は、「③差別するような人間になりたくない」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=90.0%)、部落出身であることを「カミングアウトできる(出身を告げられる)社会になればよい」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=73.4%)、「部落問題をできるだけたくさんの人に知ってもらいたい」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=68.5%)などである。差別行為については非常に批判的であり、部落問題をたくさんの人に知ってもらうことや、部落出身者がためらいなくカミングアウトできる社会が望ましいと考えている。言い換えれば、部落問題や部落出身者の社会における顕在化が望まれていると言えよう。

逆に、否定する意見の割合が高い項目は、「①部落差別があることを口に出さないで、そっとしておけば自然に差別はなくなる」(「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」=67.8%)、「⑧部落問題には興味がない」(「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」=66.3%)、「⑨部落差別がなくならないのは解

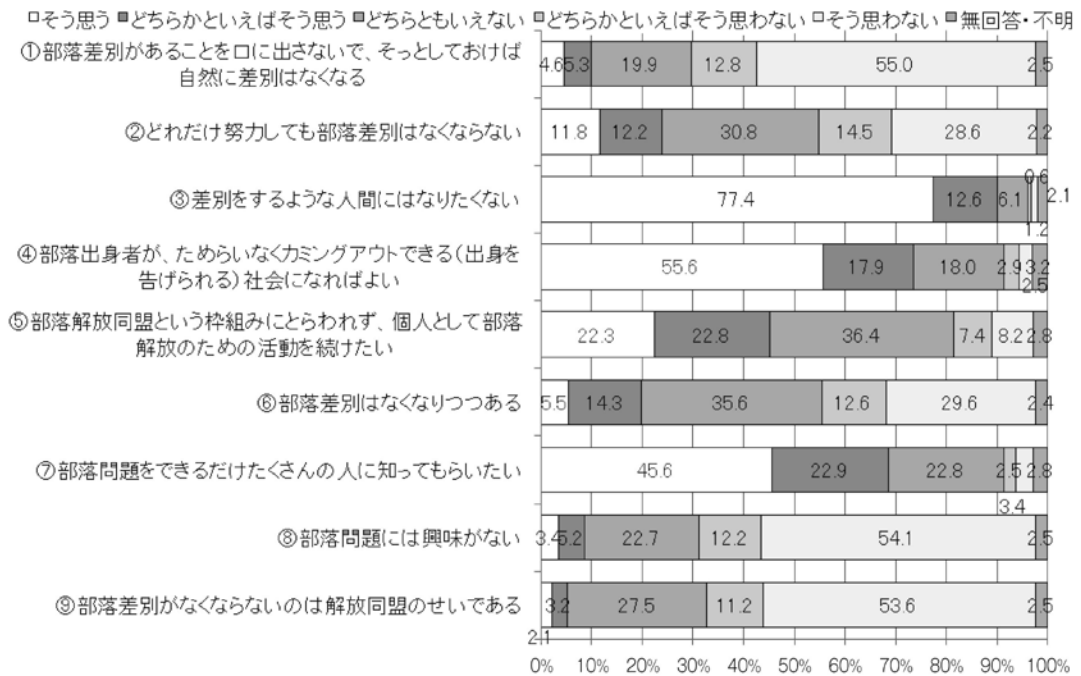


図2 部落問題意識 (N=851)

放同盟のせいである」(「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」=64.7%) などであり、いわゆる寝た子を起こすな論や当事者責任論については否定的である。

「⑤部落解放同盟という枠組みにとらわれず、個人として部落解放のための活動を続けたい」については、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」をあわせると45.1%が「そう思う」と回答しており、従来の解放運動の枠にとらわれずに活動をしたい層が半数近くを占める。「⑥部落差別はなくなりつつある」については、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」をあわせると42.2%と、4割強が「差別はなくなりつつある」とは思っていない。

これらの部落問題意識項目についても主成分分析を行った(表3)。第1主成分は、「①部落差別があることを口に出さないで、そっとしておけば自然に差別はなくなる」「⑧部落問題には興味がない」「⑨部落差別がなくなるらないのは解放同盟のせいである」「⑥部落差別はなく

なりつつある」など、「寝た子を起こすな論」に代表されるような部落問題に関する否定的意識の項目で主成分負荷量が高いことから、「部落問題への否定的意識」と名づける。得点が高いほどこうした意識が強いということである。第2主成分は、「④部落出身者が、ためらいなくカミングアウトできる(出身を告げられる)社会になればよい」「⑤部落解放同盟という枠組みにとらわれず、個人として部落解放のための活動を続けたい」「⑦部落問題をできるだけたくさんの人に知ってもらいたい」「③差別をするような人間にはなりたくない」などの項目で主成分負荷量が高いことから、「部落解放への働きかけ」と名づける。こちらも得点が高いほどこうした意識が強いということである。

以上の結果、これらの社会意識については、「部落問題への否定的意識」と「部落解放への働きかけ」の二つの変数にまとめることができた。

表4は、部落問題意識変数と先に見た社会意識変数との関係を示している。「部落問題への

表3 部落問題意識の主成分分析

	第1主成分	第2主成分
①部落差別があることを口に出さないうで、そっとしておけば自然に差別はなくなる	0.786	-0.201
②どれだけ努力しても部落差別はなくなるらない	0.321	-0.337
③差別をするような人間にはなりたくない	-0.074	0.563
④部落出身者が、ためらいなくカミングアウトできる（出身を告げられる）社会になればよい	-0.004	0.757
⑤部落解放同盟という枠組みにとらわれず、個人として部落解放のための活動を続けたい	-0.235	0.576
⑥部落差別はなくなりつつある	0.677	0.327
⑦部落問題をできるだけたくさんの人に知ってもらいたい	-0.525	0.576
⑧部落問題には興味がない	0.716	-0.362
⑨部落差別がなくなるらないのは解放同盟のせいである	0.707	-0.273
合計	3.284	1.262
分散の %	36.5	14.0
累積 %	36.5	50.5

注) 因子抽出法：主成分分析 回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

表4 社会意識変数と部落問題意識変数との相関係数 (N=764)

	日本社会への肯定的評価	社会への相対的無関心	地元生活重視
部落問題への否定的意識	0.291**	0.196**	-0.028
部落解放への働きかけ	-0.033	-0.191**	0.180**

注) **部分、相関係数は1%水準で有意。以下、表10・表20も同じ。

否定的意識」については、「日本社会の肯定的評価」、「社会への相対的無関心」とのあいだに有意な正の相関が見られる。すなわち、日本社会の今後は明るい、日本は平等な社会であるといった日本社会の評価の高さ、ならびに社会変革の展望がないなどの「社会への相対的無関心」は、「部落問題への否定的意識」の高さと結びつきがあるということである。

また、「部落解放への働きかけ」については、「社会への相対的無関心」とのあいだに負の相関が、「地元生活重視」とのあいだには正の相関が見られる。すなわち、「社会への相対的無関心」との関係においては、社会変革の展望と、部落解放へ働きかける意思がともにない方向で結びついているということであり、逆に言えば、社会変革の展望や社会を重視する意識と部落解放へ働きかける意思には結びつきがあるということでもある。また、「地元生活重視」との関係においては、地元に住み続けたいとする意識

と部落解放へ働きかける意思が結びついている。

社会意識に関する項目と、これらの部落問題意識に関する項目との関係を分析すると、部落問題に対する積極的な関心や、部落解放に向けて働きかけようとする意識は、社会への関心や社会変革に関する意識と結びついていることがわかる。部落問題も社会問題の一つであるから、社会への関心が低ければ部落問題への関心やそれを解決しようとする意識も生まれず、ここではそうした傾向を指摘できる。

3 部落出身者としてのアイデンティティ

表5は、自身を部落出身であると意識している人の割合を示している。部落出身者であるとするのは75.3%、そうした意識がない人は10.5%、「わからない」が11.9%であった。なお、年齢別に見ても有意な差は見られなかった。

表6は、部落出身者としてのアイデンティ

表5 部落出身者としてのアイデンティティ

	全体		男性		女性	
	人数	%	人数	%	人数	%
そう思う	641	75.3	437	77.6	204	71.1
そう思わない	89	10.5	54	9.6	34	11.8
わからない	101	11.9	58	10.3	43	15.0
無回答・不明	20	2.4	14	2.5	6	2.1
合計	851	100.0	563	100.0	287	100.0

表6 社会意識変数との一元配置分散分析

	人数	社会への相対的無関心
そう思う	604	-0.060
そう思わない	80	0.253
わからない	92	0.131
合計	776	-0.005
F値		4.458
p		<0.05

ティと先の社会意識変数との関係を示している。「社会への相対的無関心」とのあいだに有意差が見られ、「そう思わない」「わからない」層では社会変革が困難で、社会よりも自分の生活が大切だと考える傾向があり、逆に部落出身者だと思層では社会への関心が高く、社会変革が可能だと考える傾向が見られる。

また、部落問題意識変数との関係(表7)を見ると、「部落問題への否定的意識」と、「部落解放への働きかけ」とのあいだに有意差が見られた。「部落問題への否定的意識」は「そう思わない」「わからない」層で高く、「そう思う」層で低い。また、「部落解放への働きかけ」についても、「わからない」層で最も低く、「そう思う」層で最も高いことがわかる。すなわち、部落出身であるとする層の方が部落問題に積極的な意識を持っており、部落解放に向けて働きかけようとする意識が強い。

なお、部落出身であることをはじめて知った認知経路(表8)は、「子ども会の活動で」(28.7%)、「親から」(25.4%)、「小さい時から自然に」(24.0%)などの割合が高くなっている。

表7 部落問題意識変数との一元配置分散分析

	人数	部落問題への否定的意識	部落解放への働きかけ
そう思う	617	-0.112	0.048
そう思わない	87	0.405	-0.091
わからない	91	0.366	-0.259
合計	795	-0.001	-0.002
F値		18.068	4.205
p		<0.001	<0.05

自身を部落出身者だとする層における、部落出身者としてのさまざまな意識(図3)を見ると、差別に対する不安を感じている層が半数近くにのぼる(「部落差別を受けるかも知れないと、不安を感じることもある」:「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=47.2%)。一方で、「部落出身であることを隠したくない」は半数を超える(「部落出身であることは、できれば隠しておきたい」:「そう思わない」+「どちらかといえばそう思わない」=51.5%)。また、部落出身であることを「誇りに思っている」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=41.1%)あるいは「よかったと思う」(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=38.8%)と肯定的にとらえる意識は4割前後となっている。

これら部落出身者としてのさまざまな意識をたずねた項目についても主成分分析を行った(表9)。第1主成分は、「③部落出身でよかったと思う」「①部落出身であることを誇りに思っている」「④部落出身であることは、できれば隠しておきたい」などで主成分負荷量が高いこ

表8 部落出身者であることの認知経路

	全体		男性		女性	
	人数	%	人数	%	人数	%
親から	163	25.4	103	23.6	60	29.4
(親をのぞく) 家族・親戚から	19	3.0	11	2.5	8	3.9
学校の授業で	24	3.7	16	3.7	8	3.9
子ども会の活動で	184	28.7	132	30.2	52	25.5
地元の部落解放運動で	61	9.5	40	9.2	21	10.3
小さい時から自然に	154	24.0	115	26.3	39	19.1
その他	25	3.9	13	3.0	12	5.9
無回答・不明	11	1.7	7	1.6	4	2.0
合計	641	100.0	437	100.0	204	100.0

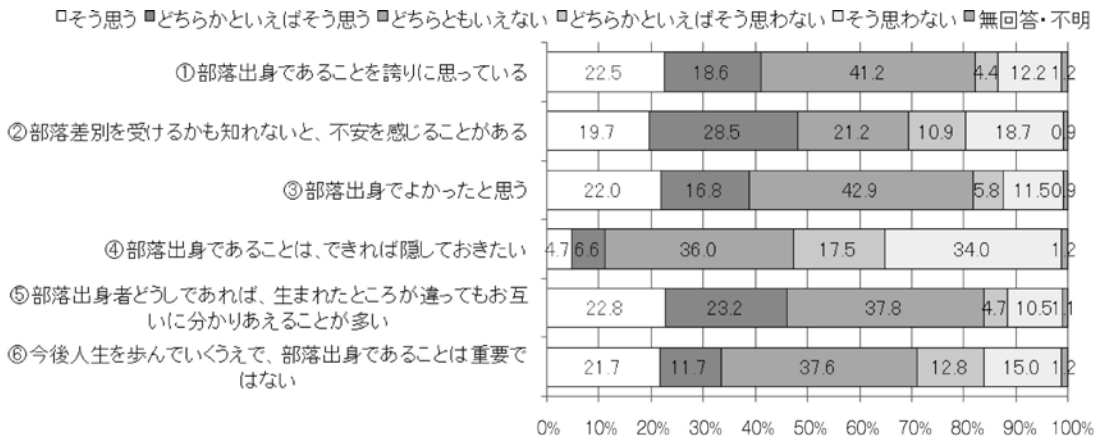


図3 部落出身者としてのさまざまな意識 (N=641)

表9 部落出身者としてのさまざまな意識の主成分分析

	第1主成分	第2主成分
①部落出身であることを誇りに思っている	0.808	0.330
②部落差別を受けるかも知れないと、不安を感じることもある	-0.219	0.778
③部落出身でよかったと思う	0.835	0.281
④部落出身であることは、できれば隠しておきたい	-0.748	0.322
⑤部落出身者どうしであれば、生まれたところが違ってお互いに関わりあえることが多い	0.185	0.582
⑥今後人生を歩んでいくうえで、部落出身であることは重要ではない	-0.216	-0.542
固有値	2.189	1.380
寄与率	36.5	23.0
累積寄与率	36.5	59.5

注) 因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

とから、「肯定的ID (アイデンティティ)」と名づける。第2主成分は、「②部落差別を受けるかも知れないと、不安を感じることもある」で主成分負荷量が高いことから、「差別への不安」と名づける。

以上の結果、これらのさまざまな意識について

では「肯定的ID」と「差別への不安」の二つの変数にまとめることができた。それぞれ、得点が高いほどこうした意識が強いということである。

これらの部落出身者としての意識変数と社会意識、部落問題意識との関係(表10)を見ると、

表10 社会意識・部落問題意識と部落出身者としての意識変数との相関係数

	肯定的ID	差別への不安
社会意識：日本社会への肯定的評価 (N=593)	-0.103*	-0.149**
社会意識：社会への相対的無関心 (N=593)	-0.290**	-0.067
社会意識：地元生活重視 (N=593)	0.278**	-0.044
部落問題意識：部落問題への否定的意識 (N=608)	-0.302**	-0.228**
部落問題意識：部落解放への働きかけ (N=608)	0.362**	0.140**

注) *部分、相関係数は、5%水準で有意。以下、表20も同じ。

「肯定的ID」については、すべての項目で有意な相関が見られた。「部落解放への働きかけ」「地元生活重視」とのあいだに正の相関、「部落問題への否定的意識」「社会への相対的無関心」「日本社会への肯定的評価」とのあいだに負の相関が見られる。すなわち、部落出身者として自身を肯定的にとらえる意識は、部落解放に向けて積極的に働きかけたいとする意識や、部落問題への積極的な意識、社会への関心や社会変革は可能であるという意識、地元を評価する意識や日本社会を否定的に評価する意識と結びついている。特に相関係数が高いのは「部落解放への働きかけ」(0.362)であり、肯定的なアイデンティティと、カミングアウトできるような社会展望など、部落解放に向けた積極的な働きかけとが結びついていることが確認できる。

「差別への不安」については、「日本社会への肯定的評価」「部落問題への否定的意識」とのあいだに有意な負の相関、「部落解放への働きかけ」とのあいだに正の相関が見られた。すなわち、差別への不安の高さは、日本社会を否定的にとらえる意識、部落問題への積極的な意識、部落解放に向けて積極的に働きかけたいとする意識と結びついている。差別への不安がありつつも、だからこそ積極的に差別をなくすよう働きかけたい、という解釈が可能だろう。

まとめると、部落出身者としての意識である「肯定的ID」「差別への不安」がともに強い層ほど、部落問題への積極的な意識や、部落解放に向けて働きかけようとする意識が強い。また、相関係数の値から、特に「肯定的ID」との間

に強い結びつきがあると言える。

4 部落出身者としてのアイデンティティとさまざまな経験との関係

本節では、部落出身者としてのアイデンティティと、さまざまな経験との関係について検討する。

1 部落問題についての会話との関係

周りの人と、部落問題に関する会話をする頻度の高さが、部落出身者としての肯定的なアイデンティティと結びついていることはすでに指摘されている(内田 2006, 2007)。本調査においてもそうした傾向が確認できるだろうか。

図4は部落問題に関する会話の頻度を示している。「よくする」「たまにする」をあわせると、割合が高いものから「部落出身の友だち」46.4%、「母親」39.7%、「父親」26.1%、「部落外の友だち」23.9%となっている。「まったくしない」割合は「部落外の友だち」で36.8%と最も割合が高い。

表11は、部落出身アイデンティティ別に会話の頻度を見たものである。いずれにおいても部落出身であるという意識を持つ層で、部落問題についての会話の頻度が高くなっている。

表12・13は、部落問題についての会話の頻度と、「肯定的ID」、「差別への不安」との関係を示している。いずれにおいても傾向はほぼ同じであり、会話の頻度が高いほど「肯定的ID」、「差別への不安」得点がいずれも高くなっている。

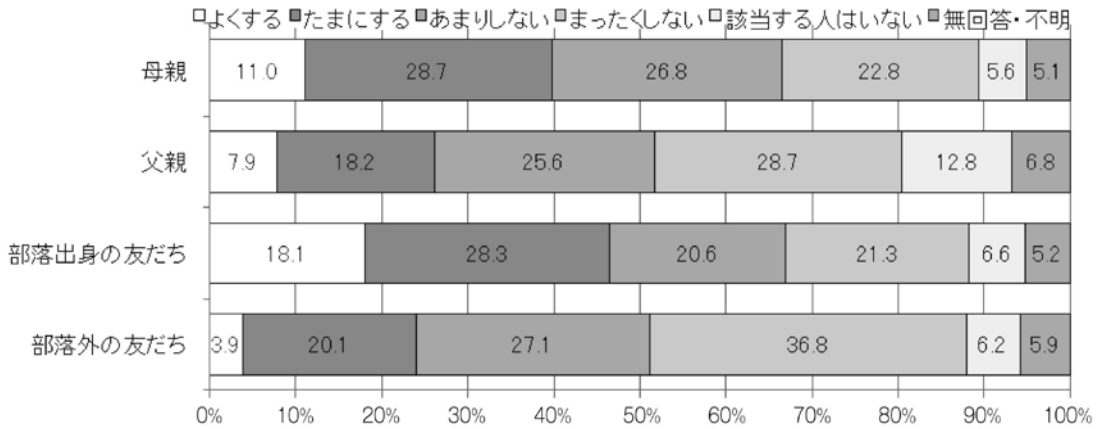


図4 部落問題についての会話 (N=851)

表11 部落出身アイデンティティ別部落問題についての会話 (N=851)

人数 %	母親 ($\chi^2=69.137, p<0.001$)					父親 ($\chi^2=36.129, p<0.001$)				
	よくする	たまにする	あまりしない	まったくしない	合計	よくする	たまにする	あまりしない	まったくしない	合計
そう思う	87	209	179	109	584	60	130	175	154	519
	14.9%	35.8%	30.7%	18.7%	100.0%	11.6%	25.0%	33.7%	29.7%	100.0%
そう思わない	3	18	23	36	80	3	12	20	39	74
	3.8%	22.5%	28.7%	45.0%	100.0%	4.1%	16.2%	27.0%	52.7%	100.0%
わからない	3	16	25	45	89	2	13	23	46	84
	3.4%	18.0%	28.1%	50.6%	100.0%	2.4%	15.5%	27.4%	54.8%	100.0%
合計	93	243	227	190	753	65	155	218	239	677
	12.4%	32.3%	30.1%	25.2%	100.0%	9.6%	22.9%	32.2%	35.3%	100.0%
人数 %	部落出身の友だち ($\chi^2=59.56, p<0.001$)					部落外の友だち ($\chi^2=18.459, p<0.01$)				
	よくする	たまにする	あまりしない	まったくしない	合計	よくする	たまにする	あまりしない	まったくしない	合計
そう思う	134	209	135	105	583	27	142	190	217	576
	23.0%	35.8%	23.2%	18.0%	100.0%	4.7%	24.7%	33.0%	37.7%	100.0%
そう思わない	9	17	16	29	71	1	14	18	43	76
	12.7%	23.9%	22.5%	40.8%	100.0%	1.3%	18.4%	23.7%	56.6%	100.0%
わからない	9	14	24	43	90	4	14	22	49	89
	10.0%	15.6%	26.7%	47.8%	100.0%	4.5%	15.7%	24.7%	55.1%	100.0%
合計	152	240	175	177	744	32	170	230	309	741
	20.4%	32.3%	23.5%	23.8%	100.0%	4.3%	22.9%	31.0%	41.7%	100.0%

2 被差別体験との関係

被差別体験(表14)については、自分が「差別を受けたことがある」とする人が21.2%、「差別を受けたことはないが、差別に出会ったことがある」が14.5%となっている。

被差別体験については年齢階層別で大きな特徴がある。表15は年齢階層別に見た被差別体験

の割合を示しているが、年齢が低くなるほど被差別体験の割合も低くなっている。若年層ほど被差別体験がないということは望ましいことではある。しかし、一定の割合で差別をする人がいる限り、年齢が高くなってさまざまな人との出会いが広がれば広がるほど、差別される可能性も高くなるのであり、この調査結果はそうした傾向のあらわれであると言えるかもしれな

表12 「肯定的ID」と部落問題についての会話との一元配置分散分析

	母親		父親		部落出身の友だち		部落外の友だち	
	人数	平均値	人数	平均値	人数	平均値	人数	平均値
よくする	85	0.348	59	0.465	133	0.510	27	0.847
たまにする	208	0.070	129	0.081	203	0.183	142	0.471
あまりしない	173	-0.052	171	-0.139	133	-0.309	184	0.058
まったくしない	106	-0.177	151	-0.098	102	-0.284	211	-0.292
合計	572	0.029	510	-0.001	571	0.062	564	0.069
F値		5.102		6.636		24.232		28.520
p		<0.01		<0.001		<0.001		<0.001

表13 「差別への不安」と部落問題についての会話との一元配置分散分析

	母親		父親		部落出身の友だち		部落外の友だち	
	人数	平均値	人数	平均値	人数	平均値	人数	平均値
よくする	85	0.363	59	0.258	133	0.401	27	0.594
たまにする	208	0.207	129	0.189	203	0.102	142	-0.045
あまりしない	173	-0.110	171	0.055	133	-0.217	184	0.068
まったくしない	106	-0.390	151	-0.255	102	-0.342	211	-0.080
合計	572	0.024	510	0.020	571	0.018	564	0.009
F値		13.558		6.457		14.887		4.082
p		<0.001		<0.001		<0.001		<0.01

表14 被差別体験

	全体		男性		女性	
	人数	%	人数	%	人数	%
差別を受けたことがある	180	21.2	127	22.6	53	18.5
差別を受けたことはないが、差別に出会ったことがある	123	14.5	77	13.7	46	16.0
特にない	488	57.3	320	56.8	167	58.2
無回答・不明	60	7.1	39	6.9	21	7.3
合計	851	100.0	563	100.0	287	100.0

表15 年齢階層別被差別体験 ($\chi^2=41.638$ 、 $p<0.001$)

人数 %	差別を受けた ことがある	差別に出会った ことがある	特にない	合計
20歳未満	7 7.1%	14 14.3%	77 78.6%	98 100.0%
20～24歳	36 19.3%	27 14.4%	124 66.3%	187 100.0%
25～29歳	45 22.5%	24 12.0%	131 65.5%	200 100.0%
30～34歳	56 28.9%	30 15.5%	108 55.7%	194 100.0%
35歳以上	34 31.8%	28 26.2%	45 42.1%	107 100.0%
合計	178 22.6%	123 15.6%	485 61.7%	786 100.0%

表16 部落出身アイデンティティ別被差別体験 ($\chi^2=46.933, p<0.001$)

	差別を受けたことがある	差別を受けたことはないが、差別に出会ったことがある	特にない	合計
そう思う	166 27.5%	103 17.1%	335 55.5%	604 100.0%
そう思わない	4 4.8%	11 13.1%	69 82.1%	84 100.0%
わからない	8 8.8%	7 7.7%	76 83.5%	91 100.0%
合計	178 22.8%	121 15.5%	480 61.6%	779 100.0%

い。

部落出身アイデンティティと被差別体験との関係(表16)について見ると、出身であるとする層で「差別を受けたことがある」が27.5%、「差別に出会ったことがある」が17.1%であり、あわせて4割を超える。「そう思わない」「わからない」層では「特にない」が8割を超えるが、部落出身である自覚がなくとも「受けたことがある」「出会ったことがある」があわせて2割近くになることは注目に値する。部落出身の自覚がある層が部落差別に敏感であるという傾向は確かにあるが、野口道彦(2000)や奥田均(2007)が指摘するように、部落差別は出身の自覚があるかどうかは別として、部落出身と見なされて生じるという側面もあることが、ここで確認できる。

では、被差別体験と「肯定的ID」、「差別への不安」との関係はいかなるものか。表17は、

被差別体験と「肯定的ID」、「差別への不安」との関係を示している。いずれにおいても傾向は同じであり、「差別を受けたことがある」層で「肯定的ID」、「差別への不安」得点がいずれも最も高く、「特にない」層で最も低くなっている。特に「差別への不安」との関係において、よりはっきりとした傾向が確認できる。実際の被差別体験は「差別への不安」をより強くすると言えるだろう。

3 両親の組み合わせとの関係

表18は、両親の組み合わせ別に部落出身アイデンティティを示している。「両親とも部落」の場合、「そう思う」は9割を超え、「母親のみ部落」「父親のみ部落」でも8割台となっている。「両親とも部落外」では「そう思わない」が52.2%、「わからない」が20.7%と、他の層と比較して高くなっているが、「そう思う」も27.2%

表17 被差別体験と「肯定的ID」、「差別への不安」との一元配置分散分析

	肯定的ID		差別への不安	
	人数	平均値	人数	平均値
差別を受けたことがある	163	0.136	163	0.377
差別を受けたことはないが、差別に出会ったことがある	102	0.085	102	0.361
特にない	329	-0.105	329	-0.305
合計	594	-0.006	594	-0.004
F値		3.628		36.984
p		p<0.05		p<0.001

表18 両親の組み合わせと部落出身アイデンティティ ($\chi^2=218.641$ 、 $p<0.001$)

人数／%	そう思う	そう思わない	わからない	合計
両親とも部落	222 91.4%	10 4.1%	11 4.5%	243 100.0%
母親のみ部落	128 88.9%	7 4.9%	9 6.3%	144 100.0%
父親のみ部落	176 84.6%	12 5.8%	20 9.6%	208 100.0%
両親とも部落外	25 27.2%	48 52.2%	19 20.7%	92 100.0%
合計	551 80.2%	77 11.2%	59 8.6%	687 100.0%

となっている。

ただし、「肯定的ID」、「差別への不安」とのあいだには有意な差は見られなかった。つまり、部落出身者としての意識は、単なる両親の生まれにもとづくものというよりは、生育過程のなかで獲得されるものだと考えられる。

4 活動参加との関係

部落解放のための活動に参加した経験（表19）については、「地域の小学生の子ども会」が59.5%と最も割合が高い。以下、「地域の青年部活動」と48.2%、「地域の支部活動」46.2%、「地域の中学生友の会」44.5%、「部落解放同盟全国青年集会」35.6%、「部落解放同盟全国高校生集会（全国奨学生集会）」35.1%、「地域の高校生友の会」35.0%、「部落解放同盟都府県連の活動」26.3%、「部落解放同盟都府県連青年部の活動」24.6%となっている。「いずれにも参加したことがない」のは10.0%である。性別に見ると、「部落解放同盟全国高校生集会（全国奨学生集会）」を除き、すべての項目で男性の方が参加経験の割合が高くなっていることが特徴的である。

表20は、「肯定的ID」、「差別への不安」と活動参加経験の相関係数を示している。「差別への不安」と「地域の小学生の子ども会」との関

係を除き、いずれも有意な相関が見られた。すなわち、各活動に参加した経験と、「肯定的ID」、「差別への不安」とのあいだに正の相関が見られる。逆に「いずれにも参加したことがない」とのあいだに負の相関が見られる。また、「部落解放同盟都府県連青年部の活動」を除き、「肯定的ID」との相関係数の方が「差別への不安」よりも高くなっていることも指摘できる。さまざまなレベルでの活動参加経験は、「肯定的ID」形成の条件の一つと言えるだろう。

部落解放運動への現在の参加状況（表21）については、「参加している」が53.5%、「参加していない」が36.5%である。性別に見ると、参加割合は男性で56.8%、女性で46.7%と、男性の方が高くなっているが、それ以外の学歴、有業・無業、正規／非正規、所得年収などの階層別や、部落に住んでいるかどうかについては有意な差は見られなかった。現在活動に参加している層はこれらの階層的立場や地域を越えて結集していると言える。

部落出身アイデンティティとの関係を見ると（表22）、「そう思う」層では65.8%が「参加している」のに対し、「そう思わない」「わからない」層ではそれぞれ44.4%、32.6%にとどまる。とはいえ、部落出身ではないと自覚している層も、一定の割合で参加していることがわかる。

活動参加と「肯定的ID」、「差別への不安」

表19 活動参加経験（複数回答）

	全体		男性		女性	
	人数	%	人数	%	人数	%
1 地域の小学生の子ども会	506	59.5	340	60.4	166	57.8
2 地域の中学生友の会	379	44.5	266	47.2	113	39.4
3 地域の高校生友の会	298	35.0	207	36.8	91	31.7
4 地域の青年部活動	410	48.2	312	55.4	97	33.8
5 地域の支部活動	393	46.2	289	51.3	103	35.9
6 部落解放同盟全国高校生集会（全国奨学生集会）	299	35.1	197	35.0	102	35.5
7 部落解放同盟全国青年集会	303	35.6	234	41.6	69	24.0
8 部落解放同盟都府県連の活動	224	26.3	163	29.0	60	20.9
9 部落解放同盟都府県連青年部の活動	209	24.6	159	28.2	50	17.4
10 いずれにも参加したことがない	85	10.0	56	9.9	29	10.1
無回答・不明	35	4.1	21	3.7	14	4.9
合計	851		563		287	

表20 「肯定的ID」、「差別への不安」と活動参加経験の相関係数（N=611）

	地域の小学生の子ども会	地域の中学生友の会	地域の高校生友の会	地域の青年部活動	地域の支部活動	部落解放同盟全国高校生集会（全国奨学生集会）	部落解放同盟全国青年集会	部落解放同盟都府県連の活動	部落解放同盟都府県連青年部の活動	いずれにも参加したことがない
肯定的ID	0.155**	0.173**	0.202**	0.211**	0.172**	0.188**	0.235**	0.165**	0.157**	-0.226**
差別への不安	0.037	0.102*	0.154**	0.102*	0.127**	0.153**	0.167**	0.138**	0.187**	-0.114**

表21 活動参加状況

	全体		男性		女性	
	人数	%	人数	%	人数	%
参加している	455	53.5	320	56.8	134	46.7
参加していない	311	36.5	186	33.0	125	43.6
無回答・不明	85	10.0	57	10.1	28	9.8
合計	851	100.0	563	100.0	287	100.0

表22 部落出身アイデンティティ別活動参加（ $\chi^2=44.684$ 、 $P<0.001$ ）

人数/%	参加している	参加していない	合計
そう思う	384 65.8%	200 34.2%	584 100.0%
そう思わない	36 44.4%	45 55.6%	81 100.0%
わからない	30 32.6%	62 67.4%	92 100.0%
合計	450 59.4%	307 40.6%	757 100.0%

表23 活動参加と「肯定的ID」、「差別への不安」とのt検定

	肯定的ID	差別への不安
参加している（N=379）	0.214	0.142
参加していない（N=196）	-0.404	-0.216
t値	7.253	4.010
p	<0.001	<0.001

との関係を見ると（表23）、参加している層では「肯定的ID」と「差別への不安」得点がともに高い。これらの傾向から、現在の活動に参加している層は、部落出身者としての意識が強いと言える。

おわりに

以上、本稿では、部落出身アイデンティティの現状を明らかにしてきたが、ここで部落出身であることを肯定的にとらえるということの意味を考察しておきたい。部落出身アイデンティティはある意味で、社会運動である部落解放運動などによって獲得され、継承されてきたと言えるが、本調査結果からもそうした傾向が確認できる。たとえば、活動参加経験が肯定的アイデンティティを形成する一つの条件となっている。

また、部落解放運動という文脈だけでなく、社会的存在としての部落出身アイデンティティも浮かび上がってきたと言えよう。社会に対する関心の高さや、社会変革が可能であるという意識が、部落出身アイデンティティと関連していることも明らかになったからである。しかし全体的に見ると、社会意識については、社会のことよりも自分のこと、すなわち私生活を重視する傾向が強い。社会に対する関心を高めることは市民社会の形成や社会問題の解決のために不可欠であるが、私事化社会のなかで同様の課題を部落の若者も持っているのである。部落の若者の多様性を見据えつつ、部落のアイデンティティが今後どのように変化し、展開していくのか、検証し続ける必要があるだろう。

なお、本調査では、自由記述で部落差別をなくすためのアイデアをたずねている。それらのなかには、身近なところで「部落内外問わず、たくさんの友人をつくること」、「さまざまな活

動に部落外の人参加を促すこと」、「学校・職場での研修を進めて欲しい」といった意見が多くあげられていた。これら部落の若者たちの要望が広く共有され、今後の社会づくりに活かされていくことが望まれる。

注

- 1)たとえば、西田芳正（1992）・八木晃介（1994）・倉石一郎（1996）・松下一世（2001, 2002）・桜井厚（2005）・内田龍史（2005, 2006, 2007）・服部あさこ（2010）など。
- 2)国勢調査の学歴区分は、最終卒業学校が「小学校・中学校」を「初等教育」、「高等学校・旧制中学校」を「中等教育」、「短期大学・高等専門学校、大学・大学院」卒業者を「高等教育」としている。
- 3)この背景には、高学歴達成をした若者が進学・就職を契機に部落外に移動するということに加え、従来から指摘されてきた階層的な格差にもとづく低学歴傾向が克服されていないという問題があると考えられる。部落の低学力問題については、高田一宏（2008, 2009）を参照。

文献

- 部落解放・人権研究所編，2011『部落青年の部落問題認識調査報告書』。
- 服部あさこ，2010『マイノリティ女性のアイデンティティ戦略——「母親性」の役割』専修大学出版局。
- 倉石一郎，1996「三世代におけるアイデンティティと生き方」部落解放研究所編『地域の教育改革と学力保障』解放出版社：145-164。
- 松下一世，2001「青年のアイデンティティ形成——心理的な側面から」『部落の21家族』解放出版社：453-504。
- 松下一世，2002『18人の若者たちが語る部落のアイデンティティ』解放出版社。
- 野口道彦，2000『部落問題のパラダイム転換』明石書店。
- 西田芳正，1992「アイデンティティ・ポリティクスの中のアイデンティティ——被差別部落出身者の生活史調査を手がかりに」『ソシオロジ』第37巻第2号：3-19。
- 奥田均，1998「差別の現れ方の全体像に迫る」『人権のステージ——夢とロマンの部落解放』解放出版社：

36-72.

- 奥田均, 2007『見なされる差別——なぜ、部落を避けるのか』解放出版社.
- 桜井厚, 2005『境界文化のライフストーリー』せりか書房.
- 高田一宏, 2008「同和地区における低学力問題——教育をめぐる社会的不平等の現実」『教育學研究』75巻2号: 180-191.
- 高田一宏, 2009『部落の低学力——近年の調査からみえてくるもの』『部落解放研究』186号: 15-30.
- 内田龍史, 2005「被差別部落出身青年のアイデンティティ評価——2003年「部落解放第47回全国青年集會参加者アンケートから」『市大社会学』(大阪市立大学社会学研究会)第6号: 65-78.
- 内田龍史, 2006「部落出身青年のアイデンティティと社会関係——奈良県連青年部調査結果から」『奈良人権・部落解放研究所紀要』(奈良人権・部落解放研究所)第24号: 81-100.
- 内田龍史, 2007「被差別部落マイノリティのアイデンティティと社会関係に関する研究」大阪市立大学

大学院文学研究科人間行動学専攻社会学専修博士論文(未公刊).

- 内田龍史, 2010「期待される「部落民」像——アイデンティティの獲得と継承」黒川みどり編著『近代日本の他者と向き合う』部落解放・人権研究所: 281-308.
- 我妻洋, 1964「部落出身者の自己像」『自我の社会心理』誠信書房: 300-334.
- 八木晃介, 2004『「排除と包摂」の社会学的研究——差別問題における自我・アイデンティティ』批評社.
- 山本登, 1959「差別意識と心理的緊張」『人文研究』10巻12号: 35-59.

付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「被差別部落マイノリティの社会的アイデンティティと地位達成メカニズムに関する研究」(若手研究(B)、課題番号21730420、内田龍史研究代表者)の研究成果の一部である。

明日を拓く 87

特集

「故・中山英一氏を追悼し、その足跡を追う」

中山英一さんを悼む

竹之内健次

追悼・中山英一先生を偲んで

寺澤 亮一

中山英一さんを悼む

和田 献一

中山英一先生の死を悼む

平井 明

追悼・中山英一さんを偲ぶ

横田 雄一

《座談会》

故・中山英一氏を偲んで

星沢重幸／葦澤久人／島田一生

高橋典夫／長谷川サナエ／松島一心

(司会) 藤沢靖介・吉田 勉

《連載》 古文書を楽しむ(四)

古文書を読む会

《本の紹介》 大森直樹編『子どもたちとの七万三千日』

——教師の生き方と学校の風景——

桐畑 善次

頒価1050円(本体価格1000円)

発行||東日本部落解放研究所 発売||有解放書店

東京都台東区今戸2-8-5 ☎03・5603・1861